おおむらいてうを記念する会ニュース

らいてうと平和

櫛田　ふき

憲法第九条、戦争放棄を、わが意を得たと喜んだらいてうは、これを支持して行動を怠らなかった。

一九五〇年には、上代たの等と共に「非武装国日本女性の講和問題への希望要項」を来日中のダレス米高官に手交したのをはじめとし、六〇年には各界代表と共に「完全軍縮、安保破棄」を声明。六五年には世界平和アピール七人委員会を結成、「アメリカのベトナム侵略に反対し、ベトナムに平和を」要望した。

つづいて翌六六年には各界婦人と共に「ベトナム戦争をやめさせるための全日本婦人への訴え」を発表。「ベトナム話し合いの会」を呼びかけ、広くベトナム問題解決のための集まりを作った。特にキリスト教婦人矯風会は共鳴し、事務所を引き受け、事務長としてらいてう、代行に間島路子（婦団連）が当たった。一九七〇年には病中をも顧みず、らいてうは先頭に立って成城の町をデモ行進、安保廃棄闘争を怠らなかった。ベトナム支援のカンパ箱（人形型）は死の枕辺に残されていた。

（世話人代表）

らいてうと私

中嶋　公子（さとこ）

とても不思議な気がしている。私は主にフランスの女性問題や女性思想を調べていて、いまはボーヴォワールの『第二の性』の新訳に友人たちと取り組んでいる。これが終わったら本格的に日本の女性思想家、らいてうと高群逸枝を研究しようと思っていた矢先に、思いがけず「茅ヶ崎・平塚らいてう記念碑を建てる会」の会長代行を引き受けることになったからである。

らいてうは、自分の言葉で自分の思想を語った人である。これは当たり前のようでいて、なかなかできないことだ。とくに日本人にはむずかしい。ある時期から、日本の文化・思想は輸入商品のようになってしまったので、西欧の影響を受けつつ自前の思想を紡ぎ出すのはとてつもない力を必要とする。

らいてうは、女が無能力者とされた時代に、この困難を生きた女（ひと）だ。らいてうのさまざまな声を聴きつつ、「元始、女性は太陽であった」と、ボーヴォワールの「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」の言葉のあいだを見ていきたいと思っている。

そしてもう一つ、一日も早く彼女を語り伝える碑が建つように、仲間たちとがんばるつもりである。（翻訳者・茅ヶ崎らいてう記念碑を建てる会会長代行）

らいてう先生のお手紙

三枝佐枝子

私の書斎の戸棚の奥には、古びた箱が幾つか入っている。その中には、私がかつて『婦人公論』の編集者であった時に、折にふれて執筆者の方からいただいたお便りが入っているのである。

編集の仕事から離れてもう長い歳月がたつので、私はその箱の中を整理することも忘れていた。しかし、最近ある必要からその箱をあけてみると、たくさんの手紙の中から、なつかしい平塚らいてう先生からのお葉書が四通と、お手紙が三通出てきたのであった。

葉書四通の中の三通は色あせた二円の葉書であるが、一通は昭和四十二年のもので、ご夫君の奥村博史先生の裸婦を描いた絵のものであったのがなつかしかった。お手紙は昭和二十七年と二十八年のもの、それから住所の書いてないものがあって、これは「婦人党内閣成立す」という特集をした時の、原稿に添えられてあったもののようである。

昭和二十九年十月号の『婦人公論』では「婦人党内閣成立す」という特集を組み、らいてう先生を婦人党総裁にあおぎ、各閣僚は、外相に坂西志保氏、蔵相に石垣綾子氏、労相に山川菊栄氏ほかというように、すべての閣僚は第一線で活躍しておられる女性の方々を総動員し、その方々による内閣初閣議を掲載したのであった。

今読み返してみてもこの企画は面白いと思うが、中でも圧巻なのはらいてう先生の書かれた「婦人党内閣宣言」である。それは大へん格調の高いものであり、吉田ワンマン首相より平和裡に政権を奪取した婦人党が、婦人の日頃の切なる願いをいかに政治に生かすかについて、力強く謳いあげているのである。「その昔『元始、女性は太陽であった』と叫んだこの国の婦人の『人権宣言』は、今日、婦人が立法、行政の主体者たることによって、初めてその実を挙げ得るに至ったのであります」と、らいてう先生ご自身が書いておられるのが面白い。

この時のお手紙の中には、らいてう先生がこの原稿を執筆され、また閣議の内容に手を入れられるのに、大へんご苦労なさったことが書かれている。

その他のお手紙でもそうだが、先生は当時の私のような若い編集者に対して、いつも温かいお心をもって接して下さり、いろいろ教えて下さろうとされるのであった。こういう企画をたててはどうかと親切に書いて下さっているのも、ほんとうにありがたいことであった。

先生のあの優雅なお姿、穏やかなお話しぶりが聞かれなくなって二十五年たつ今、私はこれらのお手紙を読み返しながら、ありし日の先生の見事さを、なつかしく思い浮かべているのである。

（『婦人公論』元編集長）

第14号　1996年７月１日　平塚らいてうを記念する会　東京都渋谷区千駄ケ谷4-11-9-303 TEL03-3401-6147

没後25年 らいてう忌のつどい

らいてう忌の集い「聞こえますからいてうからのメッセージ」が五月四日午後、東京ウィメンズプラザで開かれ、二百八十人が参加、らいてうの業績をしのびました。

折井美耶子さんの司会で櫛田ふきさんの主催者あいさつ、檀上さわえさんの独唱、宝井琴桜さんの講談、そして、らいてうの会から井上美代さんが、茅ヶ崎・らいてうの会から中嶋公子さんが会の紹介と記念碑建立運動を説明し、協力を訴えました。

講演する落合恵子さん

檀上さん（右）と小林さん

宝井琴桜さん

檀上さんは、らいてうのすきな紫色のドレスで「元始、女性は太陽であった」と「山の動く日きたる」の二曲を、作曲者小林南さんの伴奏で格調高く伸びやかに歌いあげました。

つづいての講談は琴桜さん創作の「平塚らいてう―新婦人協会編」、抜き読みの一席。らいてうが市川房枝と出会い、国会請願運動に奔走した一九二〇年前後を、張り扇を打ち鳴らして朗々と語りました。

記念講演は作家の落合恵子さんの「いのちの感受性―女から女へ」。

――らいてうが生涯かけて実現を求め、訴えてきたテーマは、没後二十五年の今も現在進行形でつづいています。今起きている様々な問題、薬害エイズ、住専問題、沖縄の少女の事件、メディアの暴走なども、らいてうが「女の声を大切に」と訴えてきたことに、耳をかさずにきた社会の矛盾のあらわれではないでしょうか。らいてうは「生きるということは行動することだ」といいました。このような社会に対して、沈黙の共犯者にならず、異議申し立てをすること。「ノー！」といえる勇気ある人たちに「がんばって下さい」とおまかせするのではなく、「私も少しですが一緒にやります」といえるように。ネットワークをニットワークに―編物のように細かく編んだり解いたりして、疲れたら休みながら行動しましょう、と語りました。

本の紹介

まんが「平塚らいてう物語」

作・竹中らんこ

らいてうの命日、五月二十四日に、その生涯をまんがでたどる本書が出版された。作者は長岡京市在住のまんが家（写真）。京都市立芸術大学では日本画を専攻した。昨年一年間、新婦人しんぶんに連載されたストーリーまんがに加筆し、協力者の小林登美枝作成による年譜とあとがきがそえられている。

「まんがはあくまでも作りものですから、皆さんの持っていらっしゃるらいてう像をこわさない範囲で私のらいてう像を描きました」と作者。高校時代、日本史の教科書にらいてうの写真がのっており、当時ベトナム戦争に反対し支援運動をしていたらいてうの姿勢に強くひかれたという。自伝等を熟読し、らいてうのメッセージを若い層に伝える努力がしのばれる労作。

（かもがわ出版刊　一二〇〇円）

「らいてう忌」アンケートより

素敵なつどいでした

八十八人がアンケートに応えてくれました。初参加が六五・九％。六十代以上二九・二％、五十代二〇・七％、四十代三一・七％、三十代以下一八・二％。

〈独唱〉心にしみ入る歌／美しく心が洗われた／作曲の苦労と力量を感じた／格調高くすばらしかった／ぜひテープを。

〈講談〉話芸にひきこまれた／ユーモラスでポイントはしっかり／わかりやすく面白かった／全作シリーズで聞きたい。

〈講演〉心ゆさぶるメッセージ／内容の濃い話／共感できた／外国作家が紹介されたが読書家としてさすが／勇気がわいた等、素敵な会だったと喜ばれました。

＊あの歌をもう一度

らいてう忌で披露された歌のテープができました。頒価一五〇〇円（予定）。

「そぞろごと—山の動く日きたる」

「元始、女性は太陽であった」

独唱　檀上さわえ　伴奏　小林南

☆お申し込みは代金と送料（一九〇円）をそえて平塚らいてうを記念する会へ。

＊十月に「青鞜と女人芸術」展

世田谷文学館で特別展「青鞜と女人芸術—時代をつくった女性たち」が企画され、らいてうの遺品も展示されます。

会期　十月十日～十一月二十四日

会場　東京・世田谷文学館

＊一九九六年度会費納入のお願い

個人一口三千円。団体一口五千円。